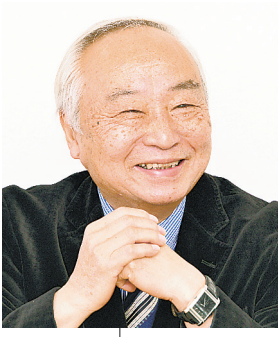
論説

少子化と社会保障

宮武 剛



みやたけ・ごう　NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院顧問

「年金」神輿の担ぎ方

年金が3年ぶりに増額される（4月分以降）。物価高騰の折から朗報だが、「マクロ経済スライド」の発動で物価上昇分を補えるほどの増額ではない。

それにしても、こんな難しい名称をなぜつけたのか。少子化で支え手が減り、長命（高齢）化で受給期間が長くなる。そのため年金の伸びを抑える方策だ。

2004年度の制度導入時、当時の坂口力・厚生労働大臣に「実態は少子長命化に応じた減額率、そう名付けたらどうか」と直談判したのだが、採用されなかった。

「減額率」などと名付ければ、世論は反発し、国会はない。分かりやすく説明するため「年金お神輿論」を考案した。

働く人々は所得に応じ保険料を払う形で、年金という神輿を担ぐ。「もう歳だ」と引退すれば、年金を受け取る形で、いわば神輿に乗せてもらう。

例えば普及し、国会でも時に大臣が「先行きは肩車型へ」などと答弁している。

制度を守るために、どうするか。これも神輿にたとえると、説明しやすい。

①馬力を出そう（保険料引き上げ）②乗車拒否（支給開始年齢引き延ばし）③神輿の軽量化（給付水準引き下げ）④神輿を突っ張り棒で補強（国庫補助の増額）⑤潰れそうな神輿の吸収・合併（各制度の一元化）。

この5通りの対策を長年かけて実施してきた。マクロ経済スライドも③の神輿の軽量化の一環である。

次の年金改正へすでに議論は始まった。

有力な方策は②の変形で神輿をもっと長く担いでもらう。全員加入の「国民年金」（厚生年金では基礎年金部分）の納付期間を最長40年から5年延長する（20～65歳）。それだけ保険料収入も個々人の支給額も増えるが、非正規労働者も含め65歳まで働ける環境・条件を整えられるか。

同時に基礎年金の半分は国庫で負担されており、④の突っ張り棒の補強に概算1兆円かかる。この財源確保も難問だ。

もちろん最大の課題は神輿を担ぐ若い世代が生まれ育つかどうか。「異次元の子育て支援」（岸田首相）に今度こそ総力を挙げ、少子化を克服しなければ、年金という老後の安心も手にできない。（本紙論説委員）

担ぎ手が多く、乗り手が少ないと、神輿は威勢良く進む。逆に、担ぎ手は減り、乗り手は増える少子長命化で神輿は勢いを失う。

神輿型から3人で1人を担ぐ「騎馬戦型」、2人で1人を運ぶ「かご屋型」、1人で1人を背負う「肩車型」へ変形していく。この

でも追及される。訳の分からない難解語でごまかしたのだろう。

年金制度は細かな規則まで立ち入ると複雑多岐だが、基本構造はそう難しく